

《研究ノート》

主題語「犬 (suns)」とその縁語を含む

ラトヴィア語の諺

田 中 研 治

要 約

主題語「犬 (suns)」を含むラトヴィア語のことわざ文脈にはどのような「縁語」が現れるかを調査する。数種類の名詞縁語と動詞縁語が現れることわざ文脈を観察した結果、ラトヴィア語の犬ことわざには、次の三つの文化的価値観を伴う「犬観」が反映しているらしいということを指摘する。

- (1) 犬の習性（本能）的行動と犬自体の顕著な身体的特徴。
- (2) 犬と人間との相互（主従）関係；犬は人間の忠実な協力者。
- (3) 犬は人間とは一線を画すべき卑しい存在。

1. はじめに

武田勝昭（1992：11ページ）は、次のように述べて、ことわざ研究の方法論的難しさを指摘する。

「(ことわざは) 個別に解釈したり解説したりするには向いているが、それらに共通する特徴を引き出して記述するのはむずかしい対象である。あらゆる事例にそなわっていると思われる特徴を絞り込めば、理論的整合性を保つには都合がよいが、ことわざの像が痩せ細る。逆に、あれもこれもと特徴を数え立てると、ことわざの像は散漫になる。」

*2003年12月8日受理。

記述の難しさといっても、上で指摘されているのは、それが完全に不可能だというわけではなく、要するに説明の首尾一貫性のそれだと思われる。どのような視点からことわざの様態や特質を考察するかが問題となるのである。形式のみにこだわる人もいれば、内容解釈本位のアプローチもある。純粋な比喩理論からの考察もありうる。もっぱら文化人類学的な立場を重視する場合もあろう。ことわざの使用面や、その教育的効果を重視する方向もあろう。様々な方法が、様々な研究の視点から可能なわけである。

今回、筆者はラトヴィア語のことわざを扱うに際して、特定の既存の方法論を援用するわけではない。ラトヴィア語のことわざ中、極めて例の多い、犬ことわざをとりあげ、主題語「犬」という動物のどのような側面や特徴にラトヴィア人の意識が集まっているかを考える。特にことわざの数値的な面を重視し、「主題語」に対して「縁語」という概念を中心にして考察する。言語文化の一形態であることわざ文脈の中で、犬という言語素材に向けられたラトヴィア人の認識パターンがどのように現れているかを探ってみたい。

2. ラトヴィア語のことわざと成句表現

今回利用する文献 *LTMSP*¹ の後半部にはことわざ (*sakāmvārds*) とともに、成句表現 (*paruna*) が数多く収録されているが、一般的にラトヴィア語では、それら両者を次のように区別している。『百科辞典』(*Enciklopēdiskā Vārdnīca*) による説明は次のとおりである。

paruna: viens no brahilogismu paveidiem; relatīvi patstāvīgs, parasti pārnestā nozīmē saprotams teiciens, ar kuru raksturots kāds objekts, darbības norise vai apstākli.

[大意：短い定型表現の一種。比較的形式の独立性が高い。表現全体が比喩的な意味を担い、叙述対象、行為の様態や状況を描写する。]

sakāmvārds: viens no brahilogismu paveidiem afor., parasti pārnestā nozīmē

saprotams izteiciens, kas pauž vispārinātas atziņas par cilvēka raksturu, darbu, ēt. un sadzīves normām.

[大意：短い定型表現の一種。表現全体がアフォリズムや比喩的な意味を担い、人間の性質、行動、倫理観、および生活（人生）の規範を一般化して述べる。]

この説明からわかることは、前者が「描写や表現の巧妙さそのものを狙った、簡潔な定型表現」で、戒めや、教訓、忠告などを含まないことである。Parunaには形式上、雑多な種類が含まれる。その代表的なものは成句的比喩表現（例えば、強意的直喩や隠喩）、あるいはクリーシェイなどがある。

一方、後者は人々の人生や日常生活、あるいは社会環境に密着した伝統的な処世訓、金言の類い（proverb, saying）を指す。それは人間が生きるうえで大切な規範意識の基盤や指針であり、生活の知恵や経験、忠告、批評などを簡潔な表現で教訓的に伝えることを本来意図している。一般的にラトヴィアでことわざといえばこの後者を指す。多くは前件と後件の意味関係を示すための形式的表現枠や、韻律上の修辞要素（いわゆる好音調や脚韻、頭韻など）を備えるのが普通である。

Paruna も sakāmvārds も、ラトヴィア民族独自の世界観と思考方法が言語表現に凝縮したものである点においては共通性があり、当然のことながら、しばしば民俗学的、文化的背景を下敷きにした解釈が要求されることもある。その意味では、両者とも《文化的定型表現》と呼べるかもしれない。Paruna は一般的には、「定型的成句表現」(frazologisms) のカテゴリーに含まれるもので、成句表現辞典などには極めて多くの paruna が収録されているのが普通である。

本稿においては、上記の区別を念頭に置き、paruna も準ことわざ的表現とみなし、sakāmvārds とともに、考察の対象にする。

3. 動物名の主題語（キーワード）

*LTMS*P に収録されたことわざを、すべての意味分野別にわたって詳細に分類することはほとんど不可能に等しい。次に比較的分類が容易な「動物ことわざ」の主題語と、その実例数を筆者が調査した結果を紹介する。

20例以上のことわざが収録された動物名の主題語とその出現例は次のとおりである。

cūka (豚) 50例	gailis (雄鶏) 27例	kakis (猫) 52例
lācis (熊) 24例	putns (鳥) 35例	suns (犬) 143例
vilks (狼) 71例	vista (雌鳥) 23例	zirgs (馬) 53例
zakis (兎) 25例		

これら10種類の動物名のなかでも、とりわけ人間の日常生活と深く係わっている家畜の種類が多いのが目立っている。野生動物でも、比較的人間社会と密接な関係をもつと思われる動物が数種類混じっている。特に、家畜の中でも犬ことわざ例が飛び抜けて多い。143例ものことわざ数は、実はこの文献中のすべてのことわざを調べた結果、数量的には第1位を占める。本稿で犬を主題語とすることわざを取り上げるのは、他ならぬその高い出現頻度数の故である。因に、第2位は「神 (dievs)」(131例)、第3位は「目 (acs)」(77例)、第4位は「狼 (vilks)」(71例)、第5位は「子供 (berns)」(70例) である。²

4. 主題語「犬」とその縁語環境

上でも述べたように、*LTMS*P に収録されたラトヴィア語のことわざ（成句表現含む）6400例中、最も高い頻度で現れるのが主題語「犬」を有することわざである。この点に着目して、これらのことわざがどのような縁語環境で現れるかを概略調べるのが今回の研究ノートの目的である。

すなわち、主題語「犬」が、ラトヴィア語のことわざ文脈において、どのような意味の名詞や動詞と「縁」があるのかを調べることである。「ことわざ文脈における関連語句間の縁」を探ることによって、ラトヴィアの犬ことわざでは犬のどのような典型属性、すなわちどのような習性や行為、しぐさや身体部位に表現の焦点が当てられているか、あるいは犬が何に見立てられ、ラトヴィア人の目を通じて、人間のどのような営為の反映として認識されているかを理解するヒントが得られる可能性がある。それは他ならぬラトヴィアの豊かなフォークロア（伝承民俗文化）における「動物文化（犬飼育文化）」の一端を垣間見ることでもある。

なお、「縁語環境」というのは、一般的には語（句）レベルでの「連語関係（collocation）」を思い起こさせる。しかし「縁語環境」は、ある語（句）と語（句）の結合が、社会習慣化された連語の意味結合関係（選択制限）ほど固定的、義務的ではない。「縁語」は主題語との日常的な幅広い連想関係に基づいて選択された語（句）であり、主題語とは比較的緩やかな共起関係にあるという意味で、「縁語環境」という用語をここでは使用している。

以下、主題語「犬」がラトヴィア語のことわざにおいて、どのような名詞、動詞と結び付くかを示すため、主な「縁語」を含むことわざをあげる。（ ）内の番号は原典のことわざ番号である。LTMSF においてはすべてのことわざの主題語がイタリックで示してある。なお、paruna の例では、ことわざ番号の後に P の文字を記す。

5. 主な名詞の縁語

名詞の縁語というのは、例えば、「前件部-後件部」という典型的なことわざ構造を想定した場合、前件部（あるいは後件部）に主題語「犬」が現れるとして、それと意味的に対応すると考えられる後件部（あるいは前件部）の名詞を

指したり、主題語「犬」が主語である場合、文脈中の動詞の目的語になる名詞なども含まれている。ここでいう意味的な対応とは、広く考えると、犬一般に関する社会習慣的認識、百科事典的な知識のありかた、あるいは共通性の高い連想と結びつく語句を基盤とするものである。

例えば、日本語のことわざ「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」においては、前件部の「坊主」が主題語と認められるが、それに意味的に呼応する縁語が後件部の「袈裟」である。「袈裟」は「坊主」と深く関連する衣服の一部であり、「坊主」の身体的特徴（丸刈りの頭）や、お経を読むという本来的な行為などとともに、主題語「坊主」のことわざ文脈では縁語として相応しい語である。内容的には本来「袈裟」は憎しみの対象にはなりにくいけれども、この文脈では、それを縁語として併置することにより、ある人への憎しみを強調的に叙述するための契機になっている。「目は口ほどにものを言い」では主題語「目」に対して、「口」が縁語と考えられるが、同じ顔の部位同士だという共通項があるため、目と口は同じ縁語環境で現れることには何ら違和感がないわけである。

今回の調査では、犬ことわざの実例数の多少にも注目したいと思う。比較的多数の例がある縁語環境ほど、ラトヴィア人の特徴的な認識方法、連想などを濃厚に反映していると推測できるからである。

以下において、文献資料から得られた具体的な例を示す。

まず3例以上のことわざが認められる縁語例を引用する。

- 1) 犬～尻尾（以下の例において、イタリックの語 *suns*, *sunī* などが「犬」を意味し、もう一方のイタリックの語が縁語である）

(5037) *Kas sunī pārķāpis, pārķāps arī astī.*

（犬を辱めるものは、その尻尾をも辱めるのだ。）[坊主憎けりゃ袈裟まで憎い？]

(5033) 尻尾よりも犬そのものを越える方が易しい。[物事において安易な方法を選ぶことのたとえか]

(5038) 犬の上を飛び越えられれば、尻尾も越えられる。[大同小異？]

- (5046) 犬には尻尾の部分に息を吹きかけてやれ。[Stender (1761) に収録。説明では、「誰かが失敗したり、ドジなことをしたときに使われる」とある。³ 多分、一種の罵り言葉であろう]
- (5047) たとえ自分の体を自分で持ち上げられなくても、どんな犬(猫)にとっても尻尾は上げられる。[手前味噌；自画自賛？]
- (5065P) まるで尻尾を下げた犬のように。
- (5084P) 尻尾を下げた犬のように逃げて行く。
- (5085P) 尻尾を脚の間に入れた犬のように走る。
- (5087P) 尻尾のない犬。[Stender (1761) に収録。その説明では、「誰かが衣服をなくしたり、帽子（やサーベル）を身につけないで過ごさなければならない時に使用される（表現）」とある。あるべきものがない、無様な格好をいう]
- (5088) 尻尾のない犬は、喫煙パイプをもたない男みたいだ。[様にならないことのたとえか]
- (5110) 犬の体が入れば、尻尾も入る。[あとは野となれ山となれ？；難しいのは最初だけ；初めよければ終わりよし]
- (5122) 犬は自分の尻尾を踏めない。[目で目は見えぬ]
- 《犬に関しては、その特徴的な身体部分の尻尾を抜きにしては犬らしさを語れないことを示唆する》

2) 犬～ソーセージ

- (5098) *Suns, kas desu dabūjis, atpakaļ jau nedod.*
 （一度ソーセージを得た犬は、それを戻すことはしない。）[一度やったことが成功すれば、その面白みを忘れずにいること、のたとえか。既得権は自分の利益、のような意味か]
- (5022P) ソーセージで犬をだますように[誰かを]だます。[好物のソーセージは犬を操るための手段と見ている]
- (5048P) まるで犬にソーセージのように（何かが長時間残らない）。
 [Stender (1761) に収録。「浪費家に何かを与える時に使う」とある]
- (5049) 犬に肉（ソーセージ）を要求せよ。[これも Stender (1761) に収録されている。「けちに徹せよ」とある]
- (5142) 犬からソーセージを買うことはできない。[Stender (1761) に肯定形の原型が収録。「詐欺師から何かを入手する」の意味と

ある]

《犬の好物といえ、まず人間に貰うソーセージであることを示唆する》

3) 犬～狼

(5026) Bar (baro) nu *sunī*, kad *vilks* jau *kūtī* !

(狼が既に家畜小屋に入っているときに、犬を飼え！) [後の祭り；備えあれば憂いなし；泥棒を捕らえて縄をなう。Stender (1789) に収録。cf. ラテン語では *Sērum cavendi tempus est, in mediis malis.*]

(5027) 狼が既に家畜小屋にいるのに、どのようにして犬を飼うのか。

(5028) 狼が既に門の所に（羊の所）まで来ているとき、犬を飼え。

[上の2つはどちらも5026の類似ことわざで、番犬としての犬の用途を示唆する。次の2つも番犬としての犬の義務を示唆している。Stender (1761) に収録。「馬が逃げてから家畜小屋の錠をおろす」とある]

(5160) 多くの犬小屋があれば、それだけ狼が周囲にいるということだ。

(5162) 多くの犬の幸せがあるところに、狼の幸せもある。

《狼から人間や家畜を護ることが、昔から番犬としての犬の重要な務めの一つだったことを示唆する》

4) 犬～骨

(5042) Vienreiz *sunī* pieviļ ar *kaulu*, otrreiz ne ar *gaļu* nepievils.

(一度骨でだまされた犬は、今度は肉でもだまされない。)

[Stender (1761) に収録。「火傷をした子供は火を恐れる」とある。火傷した犬は冷水を熱湯だと思ふ；糞に懲りて膾を吹く]

(5052P) まるで犬に骨のように。[猫に鰹節]

(5083P) 犬が骨を自慢するように、君は何を自慢するのか。[自画自賛?]

(5100P) 犬が骨を大事にするように（何かを大事にする）。

(5151) 骨一本に2匹の犬がいるとうまくゆかない。[両雄並び立たず；二羽の雄鳥が1つの庭にいると和合しない。Stender (1789) に収録]

《骨は（人間にとっては大した価値はないが）犬にとっては生命を支え

る極めて大切な糧であることを示唆する》

5) 犬～肉

(5158) *Suṇu kūṭī gaḷu neglabā.*

(犬小屋に肉を置いておくことはできない。)[猫に鯉節；狼に羊の番をさせる]

(5123) 犬は犬の肉を食べない。[同病相憐れむ；同類は同類を知る；蛇の道は蛇]

(5042) [骨の項を参照]

(5049) [ソーセージの項を参照]

(5126P) 生肉を欲しがる犬のように跪く。[喉から手が出る]

(5127P) 暖かい肉入り団子を欲しがる犬のようにぺこぺこする。[上と類似の表現]

《犬にとって肉は大好物であることを示唆する》

6) 犬～(犬の)体毛

(5104) *Suns met spalvu, bet ne dabu.*

(犬は体毛が抜けても性質は変わらない。)[三つ子の魂百まで]

(5116) 犬は体毛が生え替わるが、人間は性質を入れ替えない。

(5117) 犬は体毛が生え替わるが、その性質は変わらない。

(5118) 犬は体毛が抜けるが、歯が抜けることはない。

《犬の体毛が生え替わるのが犬の身体的特徴と見られている》

7) 犬～兎

(5097) *Suns, kas daudz zaķu ķer, nevienu nenokēr.*

(多くの兎を追う犬は、一匹も兎を捕らえられない。)[二兎追うものは一兎を得ず]

(5133) 眠っている犬は兎を捕まえない。

(5156) 多くの犬がいて、一匹の兎を簡単に捕まえる。[多勢に無勢。

Stender (1789) に収録されている。ドイツ語のことわざをそのまま借用して翻訳したような表現]

《兎を捕まえる犬は、獵犬としての務めであることを示唆する》

8) 犬～猫

(5143) *Kad nevaid suņa, tad jārida ar kaķi.*

(犬が唸らないときは、猫を用意せよ。)[背に腹はかえられぬ；必要の前に法律はない]

(5082P) 犬と猫との鞆（のような声）。[激しい喧嘩]

(5121) 犬が自分の靴を縫うとしたら、誰が貧しい猫の靴を縫ってやるのか。

(5140) 犬の舌（口）には9つの幸運があり、猫の舌（口）には9つの不幸がある。

《犬と猫は人間生活においては最も身近な動物だが、対照的に、相いれない動物同士として捉えられている。日本語なら「犬猿の仲」》

◆類似の発想による paruna : (2072P) 犬と猫が一緒にいるように生活する。

9) 犬～パン

(5111) *Suns pieglaužas, kamēr ir maize.*

(犬はパンがあると擦り寄ってくる。)

(5129) 犬は同じ手からですらパンを受け取ることはない。[犬の用心深さへの示唆か]

(5159) 犬小屋の中ではパンを手に入れることはできない。

《犬にとってパンはやはり人間から貰う大切な食べ物であることを示唆する》

10) 犬～人間

(5090) *Suns dusmīgs paēdis, bet cilvēks -- neēdis.*

(犬は怒ると満足するが、人間は腹が減る。)[短気は損気]

(5116) [体毛の項目参照]

(5024) もし人間が犬に餌をやらなければ、一体誰が餌をやるのか。

以上が3例以上のことわざに現れる主な名詞の縁語である。次に、1～2例のみ出現する主な縁語例の一部を参考のためにあげる。日本語との対応例（あるいは類似例）がある場合は参考のためにそれを書くが、どうしても適例が見つからない場合も以下の例には若干混じっている。

11) 犬～妻

(5021) *Niknu suni apsauksi, bet ne niknu sievu.*

(恐ろしい犬を黙らせることはできても、恐ろしい妻を黙らせることはできない。)[ガミガミ小言をいう恐ろしい妻を、恐ろしい声で吠える犬に見立てている。sieva (妻) には「女」の

意味もある]

12) 犬～泥棒

(5025) *Nebaros suni -- baros zagli.*

(犬を養わなければ、泥棒が増える。)[番犬として最も重要な犬の義務を示唆する。なすべきことを怠ると、失うものが大きい]

13) 犬～皮膚

(5061) *Piktam sunim saplēsta āda.*

(怒っている犬は皮膚が破れる。)

(5154) 怒っている(どう猛な)犬は皮膚が破れる。[上との類似ことわざ]

14) 犬～歯

(5086) *Suns aug, zobī aug.*

(犬が成長すると、歯も成長する。)

(5118) [体毛の項目参照]

15) 犬～剣

(5066) *Sunim zobens vienmēr klātu.*

(犬にはいつも剣がある。)[鋭い犬歯が武器であることを示唆]

16) 犬～蚤

(5081P) *Kaujas kā suns ar blusām.*

(犬と蚤の喧嘩。)

17) 犬～豚

(5089) *Kad suns cūku nerej, tad cūka rej suni.*

(犬が豚に吠えなければ、豚が犬に吠える。)[物事には立場が逆転することがあり得る]

18) 犬～(人間の)親類

(5148) *Suņi nav radi.*

(犬は人間の親類ではない。)

(5149) [上との類似ことわざ]

19) 犬～月光

(5102P) *Rej kā suns mēnesnīcā.*

(犬が月の光に向かって吠えるように。)[星まもる犬；卑しいものの高望みは無駄]

(5103P) 月の光のもとで、とぼとぼ歩く老犬のように遠吠えする。

20) 犬～干し草

(5112P) *Kā suns pie siena kaudzes: pats neēd, otru nelaiz.*

(干し草のそばの犬のように：自分は食べず、他人にも食べさせない。) [イソップ物語の内容が縁語環境の基盤になっている。本来ラトヴィア生まれのことわざではない。意地悪人間のたとえ]

(5115P) 干し草を積んだ荷車を守る犬のように：誰にも食べさせようとしない。) [上と同様。意地悪人間のたとえ]

21) 犬～(犬の)声

(5136) *Suņa balss neklūs debesis.*

(犬の声は空へ届くことはないだろう。) [犬の遠吠え；効き目がないことのたとえ]

(5155) 犬の声は空へは届かない。[上との類似ことわざ。Stender (1761) に収録。「悪態をついても無駄なこと」とある]

上において引用したことわざの主題語「犬」と名詞縁語との関連性（特に前半1)～9)の項目)を考えると、物理的にも社会習慣的にも、犬とそれぞれの縁語がほぼ必然的な、あるいはほぼ固定化した意味関係、連想関係にある場合が最も多いようである。上でも述べたように、数量的に縁語例の多いことわざほど、少なくともそのような傾向が窺えるのではないだろうか。

例えば、「尻尾」、「狼」、「ソーセージ」、「肉」、「兎」、「体毛」、「猫」、「泥棒」、「パン」などは程度の差こそあれ、犬の存在と切っても切れない関係、あるいは極めて濃厚な関係にあるといえる。特に犬の身体(的特徴)や姿、役割、好物、警戒すべき相手など、日常生活で顕著に認められる犬の様々な典型属性や、犬と連想関係にあるものにラトヴィア人の意識が集中していることが窺える。

頻度的には、「尻尾」が縁語としては最も例が多い。言い換えれば、「尻尾」は犬の最も顕著なシンボリック身体部位として捉えられている。「尻尾」は犬の感情や心理をよく表す特徴的な部位だからであろうか(例えば、「尻尾」を下げて後ろ足の間に入れる動作は敗者や、降参の印とみなされるし、尻尾を立て

るようにして激しく振ると、相手に好意を寄せる印)。ただし、その他の身体部位（耳、鼻、目、前足、後ろ足、など）には言及がなされていない。また犬の心理状態や、犬の種類（牡犬、牝犬、個別種）などを描写する例も見られない。

「尻尾」の場合は、数量的に例が多いことから、典型的な縁語であることを指摘することが容易である。しかし逆に縁語例がわずか1例の場合でも、その例の中にこそラトヴィア人独自の認識方法が反映しているといえるかもしれない（例えば、「恐ろしい妻」を「恐ろしい犬」に見立てる場合など）。

ただ、犬という動物を介して、人間社会を構成する様々な事実や真実を簡潔に、しかもできるだけ一般的に述べるのがことわざの最低限の役割であるため、あまりにも突飛で意外な縁語は使用者の共通の理解を妨げる可能性があって、どのような縁語でもいいというわけにはゆかないようである。縁語の選択はやや誇張していえば、一種の文化的選択制限に基づくのかもしれない。例えば、上でも引用した5021番のことわざで、「恐ろしい妻」の代わりに、「恐ろしい夫」（特に異様な縁語とはいえないが）を「恐ろしい犬」に見立てることは可能であろうか。あるいはラトヴィア文化ではそのような見立て方は存在しないのだろうか。

ことわざの主題語は構造的見地からすると、原則的に「既知」のものであるから、どうしても縁語環境そのものも、ある社会独自の伝統的な価値観に基づく保守性の強いものであるといえよう。

上で引用した縁語以外にも数種類の名詞が現れているが、中にはことわざ全体の意味を理解しかねる例も少数あり、残念ながらそれらは今回は除外した。

6. 主な動詞の縁語

動詞の縁語というのは、その文法的性格上、いうまでもなく、ことわざ文脈

における主題語「犬」に関して何かを陳述するための語詞である。それは例えば、「犬が～する」という構造になる場合もあれば、「犬を～する」、「犬に～する」という場合もある。

以下においては、名詞縁語の場合と同様、出現頻度の高い順番にことわざ例を提示する。

1) 犬～吠える

(5068) *Rej, rej, sunūt, kad tik tu man nekod!*

(吠えよ、吠えよ、子犬よ、でもおまえは私に噛みつかないね。)

[Stender (1761) に原型が収録。「特に報復の気持ちがなくても激しく反対したり、口論する」という説明がある]

(5075P) 犬のように吠える。

(5089) [豚の項目参照]

(5099) 吠える犬は噛みつかない。[Stender (1789) に収録]

(5101) 犬が体を曲げると、その犬は吠える。

(5102、5103) [月光の項目参照]

(5109) 吠えない犬はいない。

(5113) 噛みつかない犬は吠えさせておけ。

(5114) 犬が吠えるような乱暴な言葉を聞くより、おとなしく従う方がましだ。

(5131) 一匹の犬だけでは長い間吠えることはない。[一人で喧嘩はできない]

(5141) 良犬は吠えず。[能ある鷹は爪を隠す]

(5143) [猫の項目参照]

(5145P) 犬同士が吠えあうように。[争いが絶えないことのたとえ]

(5150) 吠える犬がすべて獐猛とは限らない。[物事には例外あり]

(5153) 吠える犬はぺこぺこする。[5099の類似ことわざ]

《犬の最も顕著な習性の一つであり、本能的行動である「吠えること」を抜きにしては犬の存在理由が薄れる。犬ことわざの中では最も出現頻度が高い縁語。次にあげる「噛みつく」という動詞縁語としばしば共起する。「吠えること」の背後に犬の性質を感じ取っている点が興味深い。名詞縁語の「(犬の) 声」も実際は「吠える」ことと関係している》

2) 犬～噛みつく

(5029) *Izvelc suni no ūdens, viņš tev iekož rokā.*

(犬を水の中から救い出してやっても、それはあなたの手を噛むものだ。)[恩を仇で返す]

(5068) [吠えるの項目参照]

(5099) [吠えるの項目参照]

(5113) 噛みつかない犬は吠えさせておけ。[Stender (1789) に収録]

(5120) 犬は自分の脚に噛みつかない。

(5130) 良犬は死ぬときにも地面に噛みつく。[雀百まで踊り忘れず；揺り籠の中で覚えたことは、墓場まで運ばれる]

(5138) 人の前にひれ伏すよりも、犬に噛まれたほうがましだ。[安易な妥協への戒め?]

(5139P) 犬の噛みつきに耐えるように耐えなければならない。

《「吠えること」と同様、犬の最も顕著な習性の一つであり、犬が自身を守ったり、相手に攻撃するための本能的行為である。人間にとっては「危害」となる最も恐れるべき犬の習性》

3) 犬～餌を与える（飼う、養う、育てる）

(5023) *Kā suni baro, tā suns klausa.*

(犬を養ってやれば、その犬は[飼い主に]従うものだ。)

(5024) [人間の項目参照]

(5025) [泥棒の項目参照]

(5026、5027、5028) [狼の項目参照]

(5031) 小さな犬から育ててやると、その犬は年老いてもお辞儀をするものだ。[雀百まで踊り忘れず；三つ子の魂百まで]

(5063) 自分も食べ、犬にも食べさせよ、すると主人には災難が降りかかる。[情けも過ぎれば仇となる]

(5134) 犬でも自分を養うことを知っている。[人のことより我が事]

《犬を利用するためにはまず人間が主人となって餌をやり、養ってやらないてはならないことを示唆する。人間と犬との基本的接点》

4) 犬～擦り寄る（ぺこぺこする、尻尾を振る、跪く、従う）

(5023) [上記項目参照]

(5072P) *Luncinājas apkārt kā suns.*

(犬のように尻尾を振り回す。)

(5111) [パンの項目参照]

(5126、5127) [肉の項目参照]

(5153) [吠えるの項目参照]

《犬が人に擦り寄るにはそれなりの理由があるが、なんといっても主人である人間から餌を貰えることである。上の3)の項目とも深い関係が認められる》

5) 犬～棒（鞭）で打つ（叩く）、縛る

(5040) *Suni per ar nūju, cilvēku ar vārdū.*

（犬は棒で叩き、人間は言葉で叩け。）[前件部は、「犬も歩けば棒に当たる」に類似]

(5032) 熊の目の前で犬を鞭打つ。

(5041) 教会のそばの犬は叩かれる。[17世紀のヨーロッパの伝統では、犬は悪魔の化身と見なされたため、今でも教会に犬が入ると嫌がられることに由来]

(5043P) 犬を縛るように、仲間の首を縛る。

(5044P) 犬を縛るように、仲間を引っ張っていく。

《少数例のことわざであるが、やはり犬は人間に叩かれたり、手ひどく扱われる運命にあること、すなわち侮蔑、忌避の対象なのだということを示唆する》

6) 犬～（餌を）食べる

(5093) *Suns jau arī neapvārtītu neēd.*

（汚れることのない犬は、また食べることはできない。）[虎穴に入らずんば虎子を得ず]

(5094) 料理をしない犬は、食べることはできない。

(5123) [肉の項目参照]

《人間に飼われている犬でもやはり食べることには努力が必要だということを示唆する》

◆類似の発想によることわざ：(5107) 後込みする犬は肥えない。

7) 犬～獲物を捕らえる

(5097、5133、5156) [兎の項目参照]

8) 犬～逃げる（走る）

(5084、5085) [尻尾の項目参照]

(5076P) 狂った犬のように走る。

《犬が走る姿に焦点を合わせたことわざは意外と少ない》

9) 犬～涎を垂らす、くんくん鼻をならす

(5078P) *Slienojas kā suns.*

(犬のように涎を垂らす。)

(5079P) 犬のようにくんくん啼く。

《これらの動作も犬には特徴的だが、意外と例が少ない》

以上の動詞縁語の分析から概略分かることは、名詞縁語と同様に、やはり広く社会慣習的に認知された犬独特の本能的（習性的）行為、あるいは主人である人間に餌を貰い、養われている犬の従属的生活形態にラトヴィア人の視線と意識が集中しているということである。結果的には、「吠える」、「噛みつく」、「餌を与える（飼う、養う）、餌を食べる」という意味領域の縁語を合わせると、それらの実例数が特に偏って多いことがわかる。

これらの動詞縁語で表出される内容は、人間が人間中心の社会において犬に相対するとき、最も重要な意味を持つと認めている側面であり、また犬との相互依存関係や影響関係を示唆するものである。逆に犬から見れば、それらは犬自身の極めて本能的で明確な自己主張でもあるし、同時に、絶えず人間の存在を意識するように運命づけられた動物の姿を裏付けるものといえるのではないだろうか。

7. おわりに

人間社会における犬の地位が極めて手厚く保護されている国といえばイギリスであり、「犬のいない家庭は完全な家庭ではない」などのことわざが有名である。犬にとってはその社会は理想的な社会であるように見えるが、ことわざ文脈での犬の扱われ方は必ずしも良好とはいえず、よそよそしく、手厳しい扱いをされている犬の姿が散見される（Give a dog a bad name and hang him. など。また成句表現での犬も、大抵はネガティブな意味を表現するために利用さ

れている)。

現実とことわざとの食い違いの典型がここには見られる。眼前の犬の実体(実態)と、それを一度人間社会の現実的状况のなかに引き戻し、ことわざ文脈の中で言語化した姿とは違っているのが普通である。価値観の付与がなされるからである。人間はいくらでも飾った言葉で犬を美化することはできるが、それだけでは一部の犬好きの人達を喜ばせ、満足させるに過ぎない。価値観を反映した言葉の公式であることわざとしての教訓、忠告、警告、風刺、勧奨などを結晶化できず、キラリと輝かせることができないからである。従って、人間の最上の友といわれる犬でさえ、紳士の国イギリスのことわざ文脈の中では、あくまでも主人たる人間には従属的、被支配的な存在としての立場を甘受し、時にはこき下ろされる素材として登場する運命にあるようだ。

さて一方、犬がラトヴィア語のことわざに現れるとき、一般的にラトヴィア人は三つの文化的価値観を伴う視点を基盤にして、慣習的に犬を認識し、表現しているのではないだろうか。上で主題語「犬」の縁語環境を考察した結果、粗削りではあるが次のことを最後に指摘することができるであろう。

一つは、彼らが「犬の習性(本能)的行動;犬自体の顕著な身体的特徴」に意識を集中させていることである。「吠える」、「噛みつく」、「尻尾を振る」、「尻尾」、「(犬の)声」などの縁語はその事情を物語る。特に「吠える」と「噛みつく」行為に20例以上もの犬ことわざが言及している点は、まさにそのような犬の本来的な習性がラトヴィア社会では明確に認知されていることに他ならない。

犬の姿が見えても、見えなくても、その「吠える」行為と「なき声」は紛れもなく犬らしさと犬の存在を強く訴えるものである。その上、これに「噛みつく」行為が加われば、人間を恐れさせることにもなる。従って、犬の「吠える」、「噛みつく」行為が日常生活における様々な人間の行為や、人物像に重ねられ、ことわざ表現として寓意化されとなれば、当然それらは犬ことわざの中心的

存在となってくることがわかる。

二つ目は、彼らが「犬と人間との相互関係（親近性、主従関係）；犬は人間の忠実な協力者、奉仕者」といった視点から巧みに犬を捉えているらしいことである。犬は「人間が餌をやる、養う、飼う」ことにより、「人間の役に立つ」（番犬、猟犬）し、あるいは「人間に従い、主人に忠実な」存在でもあることを日常的に認めているからである。だからといって、犬を全面的に信頼しているわけではなく、「犬に賭けてはいけない（5058）」、「犬は人間の親類ではない（5148）」ということわざがあるように、ラトヴィア人は犬と人間との間に境界線を設けることも決して忘れてはいない。このような見方は次の視点とも関連するであろう。

すなわち三つ目は、彼らが犬を「人間とは一線を画すべき卑しい存在；侮蔑と疎外の対象」として認知しているらしいということである。犬を「（棒で）打つ」、「縛る」などがその典型的な見方を反映する語句である。上では引用しなかったが、*LTMS*P の犬ことわざにおいては、ある形容詞を縁語とする *pa-runā*⁴が若干観察される（例：「犬のように貪欲な（*Kārs kā suns*）」、「犬のようにこそこそした（*Slepens kā suns*）」）のでそれらを併せてみると、やはり犬は人間にとって有用な家畜ではあるのだが、時には疎外したくなるような相反する感情を抱かせる（ambivalent）対象（「かわいさ余って憎さ百倍」）でもあるのだ。⁵

人間の身勝手といえはまさにそうである。しかし、もともとことわざは、人間の自由で、勝手気ままなものの見方と解釈とを短い言語表現の枠で縛り、それを時間枠にとらわれずに一般化（同時に正当化）しようとするところに創作的原動力が潜んでいることを思えば、それも十分領けよう。同情すべきは言語素材となった犬たちである。いくら現実社会で彼らが歯を剥き出して唸り、威嚇しようとも、また噛みつこうとも、状況にぴったり合ったことわざ文脈を、見事なほど貪欲に作り出す人間の創造力（想像力）の逞しさからは逃れるすべ

はないのである。

(2003年12月5日)

注

1. 今回の研究ノートにおいて、ラトヴィア語のことわざの引用源とするテキストは次の文献である。

『ラトヴィア民族のなぞなぞ、ことわざ、成句表現集』（原題：*Latviešu tautas mīklas, sakāmvārdi un parunas*, 略記 *LTMS*P）（Kopenhāgenā, 1956）

全体の監修者は言語学者で民俗学者の Kārlis Straubergs [1890-1962] である。前半部（編者は Jānis Rudzītis）では3875例のなぞなぞ（*mīklas*）が、後半部（編者は Ojārs Jēgens）では6400例のことわざ（*sakāmvārdi*）と成句表現（*paruna*）が収録されている。

ラトヴィア語の用語では「短い定型的慣用表現」のことを《*brahilogisms*》と呼ぶが、この文献に収録されているなぞなぞもことわざも成句もすべて《*brahilogisms*》に属し、本書はそれらを約一万例収録する基本的資料のひとつである。残念ながらことわざ別にその裏の意味や用法は記されていない。

2. なお、『世界ことわざ大事典』の前書き（柴田武執筆）を見ると、この大事典に記載されたことわざの全体索引を利用して調査した結果、主題語の中でも、出現頻度が最も高い上位3語は、《子；女；犬》であることが記されている。世界中の多数の言語においては、動物に限って言うと、「犬」がことわざと最も深い関連性を有することが、実例数を基にして指摘されているのは興味深い。
3. 歴史的、通時的な視点から犬ことわざを眺めることが今回の調査の目的ではないが、古文献（18世紀に出版された Stender のラトヴィア語辞書、文法書）において記されている数編の犬ことわざの裏の意味について、参考のため適宜簡単な説明を加えている。Stender（1761）の文法書の「ことわざ一覧」は実質的には1783年（2版）と同じなので、説明では「1761年」と記しているが、原典は筆者の手元にある、1783年版を使用する。
4. 『ラトヴィア語成句辞典』（*Latviešu Frazeoloģijas Vārdnīca*）の“kā suns”（犬のような／に）の項目には、数種類の文脈的意味が列挙されている。ほぼ次のような意味である。
 - 1) 誰かが力を出し尽くした；疲労困憊して
 - 2) 誰かが寒さで震えて
 - 3) 誰かが非常に空腹で
 - 4) 誰かが厚かましく嘘をつく
 - 5) 誰かが非難されたり、蔑視されて
 すべての文脈で、この成句は人間への意味転用を示し、かつ内容的にネガティブな人間の

状況や姿を表すのがその特徴である。また他の動物名詞を使用した直喩成句の場合もそのような傾向がしばしば見られる。

もう一つの成句 *kā suni* (犬を……するように [～する]) の場合も同様に、すべて人間に対して適用され、人間に容赦なくある行為を加える内容である。その意味は、「憐れみも、遠慮もなく人を (撃ち殺す、殺す、追放する、埋める、など)」である。

5. 成句のような定型的な言語表現で動物名詞が使用される場合は、かなりの程度において、ネガティブな意味合いを含んだ用法が多く見られる。筆者はかつて、ラトヴィア語における動物名詞の直喩表現を考察したが、その時の説明では次のように述べた (田中：1999：22ページ)。

「例えば、家畜である「羊」、「豚」、「鶯鳥」、「犬」などは現実の人間生活においては経験上、極めて高い「有用性、親近性」をもつ動物であると見なされている。それは家畜を飼うことを習慣とする人間にとっては、いわば「あたりまえの」(unmarked) 了解事項である。逆に、人間側からすれば自分たちの支配下に置いていると判断しているそれらの身近な動物が、時々人間に対して予期せぬ隠れた本能的行動、習性、性格などを露にすることがある。それらは人間にとっては、人間の支配に楯突くような「抵抗、敵意、脅威、挑戦、攻撃」などの御しがたい動物の側面として受け取られる。……そのような見方やイメージが心理的に増幅されて、言葉の上では多くの動物がマイナス評価や悪意、蔑視のこもった性格づけを受けるようになったと思われる。」

参考文献

- Laua, A. *et al.* (eds.) 1996. *Latviešu Frazeoloģijas Vārdnīca*. I-II. Rīga: Avots.
- Stender, G. F. 1783. *Lettische Grammatik*. 2. Aufl. Mitau: Steffenhagen.
- Stender, G. F. 1789. *Lettisches Lexikon*. Mitau: Steffenhagen.
- Straubergs, K. (ed.) 1956. *Latviešu Tautas Mīklas, Sakāmvārdi un Parunas*. Kopenhāgenā : Imanta.
- Vilks, A. (ed.) 1991. *Enciklopēdiskā Vārdnīca*. I-II. Rīga: Latvijas Enciklopēdiju Redakcija.
- 柴田武 (編) 1995.『世界ことわざ大事典』大修館書店
- 武田勝昭 1992.『ことわざのレトリック』海鳴社
- 田中研治 1999.「ラトヴィア語における《kā+動物名詞》表現—その直喩的意味の検討—」『神戸薬科大学人文研究』23, 1-29.

Summary

Latvian proverbs containing the keyword 'dog (*suns*)' and its contextually associated words

Kenji TANAKA

(Kobe Pharmaceutical University)

This note attempts to elucidate Latvians' culture-oriented typical views of dogs through the observation of their traditional 'dog (*suns*)' proverbs. Attention is mainly paid to the contextually associated words coexisting with the keyword 'dog' in many proverbs. Latvians' own cultural sense of value with respect to dogs seems to be involved with the following three factors. Namely, they seem to concentrate their own cognition on;

- (1) dogs' instinctive behavior and their unique physical features.
- (2) dog-human relationships based on a kind of homage which particularly emphasizes dogs' loyalty to their owners.
- (3) dogs as a mean domestic animal which are often regarded as the object of contempt in human society.